

## 日本人大学生の英語学習に関する実態調査の報告 —学習動機、言語使用環境、学習内容、目標とする英語力、海外体験—

寺西雅子・荻野勝・大年順子（岡山大学教育推進機構）

Surveys on English language learning among Japanese university students:  
motivation, language use, learning content, target communication skills and overseas experience

Masako TERANISHI, Masaru OGINO, Junko OTOSHI

(Institute for Promotion of Education and Campus Life, Okayama University)

### 要旨

本稿では、岡山大学の2023年度入学生（約2300名）を対象に実施した2つのアンケート調査の結果報告とその考察を行う。大学英語カリキュラム改革や科目内容のアップデート、学習環境の整備を検討するための基礎資料の提供を目的として、入学時点での、学習動機、言語使用環境、学びたい授業内容、目標とする英語コミュニケーション能力、海外体験等について調査した。結果として、学習動機は「スコア取得志向」と「コミュニケーション志向」が高いことが示された。また約9割の学生は日常的英語使用の機会がほとんどないことがわかった。一方、約6割の学生が「話す」スキルを優先して学びたいと考えており、半数程度の学生はより高い目標を持てるような意識付けが必要であることなどが示された。

### Abstract

This paper reports on two questionnaire surveys conducted at Okayama University on students who entered the university in 2023 (approximately 2,300 students). With the aim of providing basic data for considering reform of the English language curriculum, updating course content and improving the learning environment on campus, the surveys were conducted on students' motivations for learning, daily language use, course content they would like to study, target English communication skills, duration and programs of overseas experience. The results of the survey showed that the students' motivations for learning were highly 'score-oriented' and 'communication-oriented.' Approximately 90% of students had few opportunities to use English on a daily basis, and approximately 60% wanted to prioritize 'speaking' skills in their studies. The results also showed that about half of the students need more awareness of their English communication skills so that they can have higher goals.

キーワード：日本人大学生、学習動機、言語使用環境、海外体験、アンケート調査

### 1. はじめに

岡山大学では、新しい学習指導要領で学んだ学生が入学する2025年度に向けて、英語

教育カリキュラムの検討が進行中である。入学選抜方法も多様化する中で入学時における個々の学生の英語力の幅は大きく、複数の学部を有する総合大学では英語学習に対する学生の意識も多様である。英語教育プログラムや正課外の学習環境の整備等について検討する際にも、対象となる大学生の実態をより正確に把握しておくことが不可欠であろう。本稿は、10 学部を有する本学の大学生を対象として実施した英語学習に関するアンケート調査の結果報告とその考察を行う。

## 2. 調査の背景

高等学校においては、2022 年度の新入生より、新しい学習指導要領での学びがスタートした。文部科学省が提示した「学習指導要領「生きる力」」では、新しい時代を生きるために求められる「資質・能力」が整理され、将来の社会に向かう教育の在り方として「主体的・対話的で深い学び」そしてアクティブ・ラーニングの視点が重視されるようになった。そして高等教育の目指すべき姿は、「2040 年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）」に示されたが、そこで強調されているのは学習者本位の教育への転換、すなわち学習者中心（Learner-Centered）へのシフトである。これは国内のみならず世界的な潮流として確立されつつある「教えるから学ぶへ（From teaching to learning）」（Barr & Tagg: 1995）のパラダイム・シフトを反映している<sup>(1)</sup>。現代社会の変化に適応するためには、人は自らの力で問題解決能力を身に付けなければならない。そしてその生きる力を醸成するものとして、学習者が自ら主体的に学ぶという行為が重要視されている。また同時に、大学は異なる背景、スキル、関心を持つ学習者の多様性を尊重し、多様なニーズに合わせた教育を提供することが求められている。本調査では、このような多種多様な学生がより主体的な学習者になるような大学英語教育システムについて再考するための基礎的データを提供することを意図して実施された。

## 3. アンケート調査の概要

2023 年度の入学者を対象に 2 つのアンケート調査を実施した。以下にその概要を示す。

### <アンケート調査 1>

実施時期：2023 年 6 月

実施方法：Moodle 上に質問を作成し、一斉メールで回答を依頼した。回答は任意である。回答方式は、複数回答可。

質問内容：1. 学習動機、2. 日常における英語使用の環境

対象者：1 年生（2023 年度入学生）

回答人数：1391 名

## <アンケート調査2>

実施時期：2023年4月

実施方法：入学時の全学統一外部試験として TOEIC-IP テストを実施した際にマークシートを用いて調査した。参加者は全員回答を行った。回答方式は、すべて単一回答。

質問内容：1. 入学選抜方式、2. 目標とする英語コミュニケーション能力、3. 学びたい大学英語授業の内容、4. 海外体験、5. 海外プログラム、6. 希望進路<sup>(2)</sup>

調査対象：1年生（2023年度入学生）

回答人数：2256名

## 4. アンケート調査の結果と考察

まず<アンケート調査1>で行った1. 学習動機と2. 言語使用環境に関する結果を報告する。

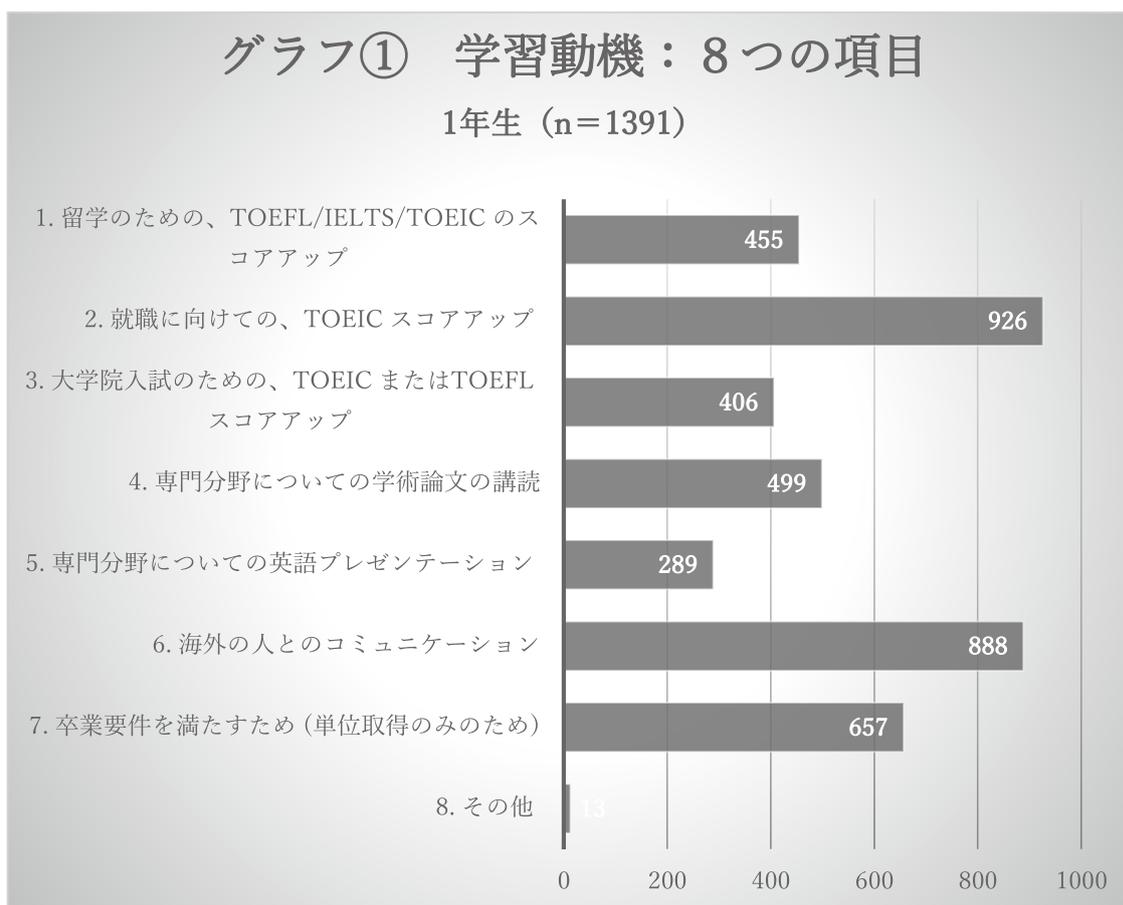
### 4-1 学習動機

学習動機に関する質問は「英語力向上を目指す動機について当てはまるものすべてにチェックをしてください。（複数チェック可）」で、選択項目は以下の8つである<sup>(2)</sup>。本稿では、2、3、4、5の質問項目の調査結果を扱う。

1. 留学のために、TOEFL/IELTS/TOEIC のスコアアップを図りたい
2. 就職に向けて、TOEICのスコアアップを図りたい
3. 大学院入試をめざすために、TOEIC またはTOEFLのスコアアップを図りたい
4. 専門分野の学術論文が読めるようになりたい
5. 専門分野について英語でプレゼンテーションができるようになりたい
6. 海外の人と、コミュニケーションがとれるようになりたい
7. 卒業要件を満たすため（単位取得のみのため）
8. その他

1～8項目のうち、1番回答が多かった項目は「2. 就職に向けて、TOEICのスコアアップを図りたい」926名(67%)で、入学して間もない1年生においても就職を視野に入れてTOEICのスコア取得を強く意識していることがわかる。2番目に多かった項目は「6.海外の人と、コミュニケーションがとれるようになりたい」888名(64%)で、「統一的動機付け」とされる異文化のコミュニケーションを意識している学生の割合が非常に高い<sup>(3)</sup>。続いて3番目に多かった項目は（「7. 卒業

要件を満たすため（単位取得のみのため）」を積極的な動機とは言えないものとして除外するとすれば、「4. 専門分野の学术论文が読めるようになりたい」499名（36%）で、4割近い学生が専門領域でのアカデミックな英文講読ができるようになることを意識している。（グラフ①参照。）

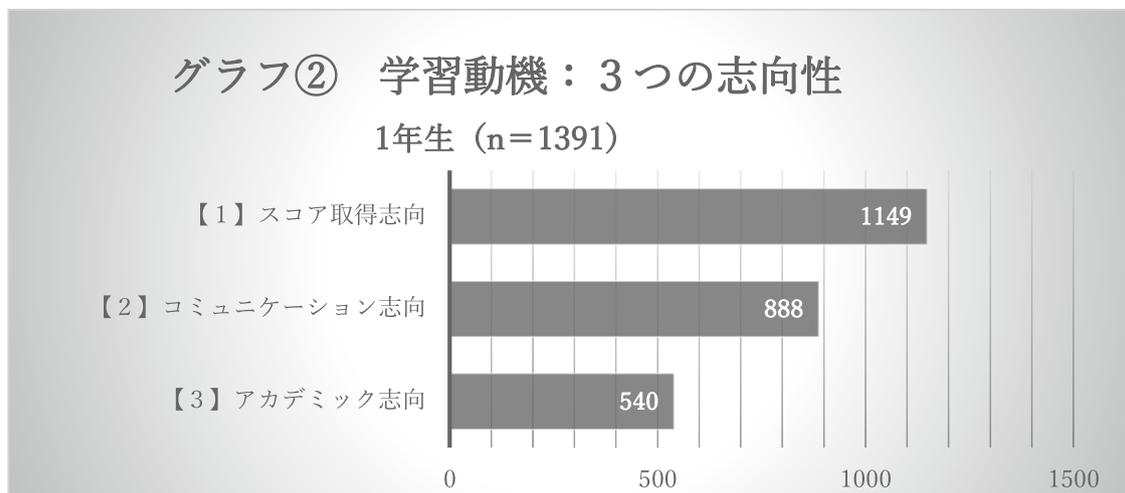


次に、この学習動機についての全体像を把握するために1～6の項目から共通した概念を抽出し、大きく3つの志向性に分類した。

- 【1】スコア取得志向
- 【2】コミュニケーション志向
- 【3】アカデミック志向

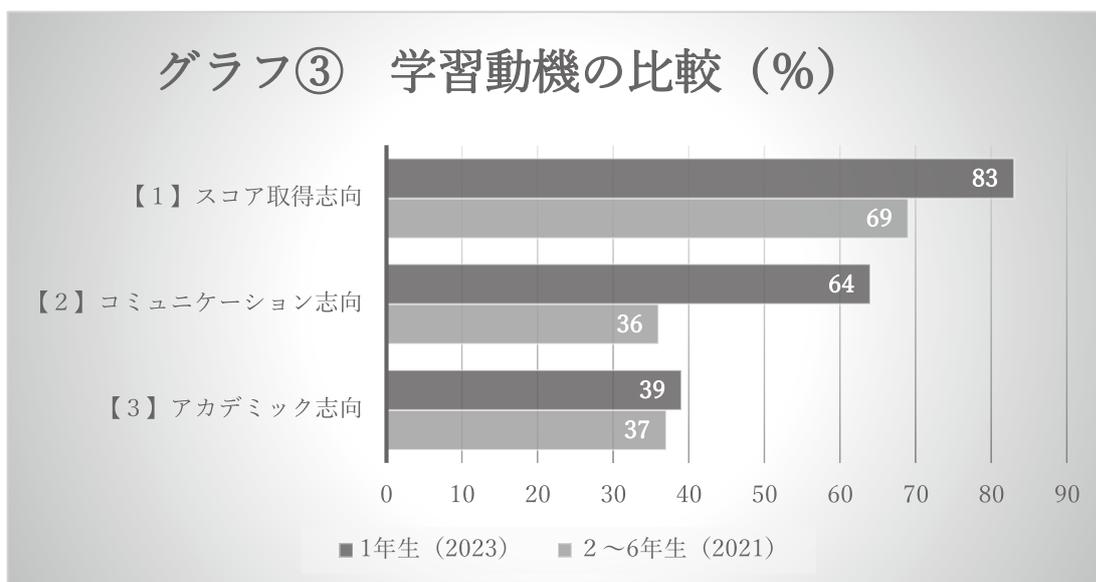
【1】「スコア取得志向」とは、学生の英語学習の動機が、就職、大学院入試、留学などのために、TOEIC、TOEFL、IELTS などの英語資格試験のスコアアップを図ろうとする傾向である。（8項目の1～3）【2】「コミュニケーション志向」は、海外の人とコミュニケー

ションをとることを動機としている。(8項目の6)【3】「アカデミック志向」は、専門分野について、英語論文を読んだり英語プレゼンテーションができるようになりたいという学習動機である。(8項目の4、5)集計方法としては、例えば、【1】は8項目の1、2、3の一つ、あるいは二つ以上を選んだ学生の数を1名とした。



【1】「スコア取得志向」の学生は1149名(83%)で、全体の8割以上と極めて高い。就職、大学院進学、留学を意識して、外部資格試験のスコア向上に向けて学習することが明確な目標となっていることが示されている。【2】コミュニケーションを志向する学生は888名(64%)であった。英語を用いてコミュニケーションしたいと考えている学生の割合は非常に高いことがわかる。【3】のアカデミックな活躍を志向し、専門分野での論文講読やプレゼンテーションをすることが動機付けになる学生は540名(39%)と約4割であった。(グラフ②参照。)

この3つの志向性に関する今回の1年生を対象とした結果を、2021年に実施した同様のアンケート調査において2年生以上の回答者438名から得られた回答結果と比較した。(グラフ③参照。)2年生以上から得られた回答では、【1】「スコア取得志向」304名(69%)、【2】「コミュニケーション志向」158名(36%)【3】「アカデミック志向」160名(37%)と、2年生以上の学生の学習動機はどの項目も、1年生の回答結果よりも低い数値となっている<sup>(4)</sup>。これは、入学して以降学年が上がるにつれて、英語学習への動機付けそのものが薄れるという状況を示していると考えられる。高年次では専門分野における学びが中心になり、英語学習から遠ざかってしまう大学生の実態が表れていると捉えることは十分に可能であろう。



3つの志向性の中でも、「アカデミック志向」の割合は、1年生と2年生以上でもほとんど違いがない。「スコア取得志向」は、1年生の8割強に対して2年生以上が7割弱という違いはあるものの、2年生以上でも高い割合である。しかし、とりわけ「コミュニケーション志向」の割合には大きな違いが見られることは注目すべきである。この違いの理由としては、前回調査がコロナ禍における自粛を経験している時期であり、コミュニケーションそのものの機会が激減していたという社会的な状況が影響しているかもしれない。しかし、入学時に持っていた英語を用いてコミュニケーションしたいという意欲が高年次になるにつれて薄れてしまったため、「コミュニケーション志向」が大きく下降したと考えられないだろうか。

大学では高年次に進むにつれて専門分野の学びが中心となり、主に1・2年次で英語必修科目を履修した後は、学生は徐々に英語学習から離れてしまい、入学までに身に付けていた英語力の低下が起りやすい。大学入学後も学生が英語学習を習慣化し、自律的に学習を継続する支援を検討する際に、1年次の高い「コミュニケーション志向」を維持できるようなカリキュラムを組むという視点は重要であると考えられる。一方、「スコア取得志向」は比較的減少幅が少ない。就職に役に立つ、大学院入学試験に使える、単位認定に使える、といった実利を伴う道具的動機付けは維持されるようである。また「アカデミック志向」は1年生と高年次生との間でほとんど変化が見られない。このような学年進行に応じた大学生の動機付けの変容も考慮して、英語科目の内容や学年配置等を検討していく必要があるだろう<sup>(5)</sup>。

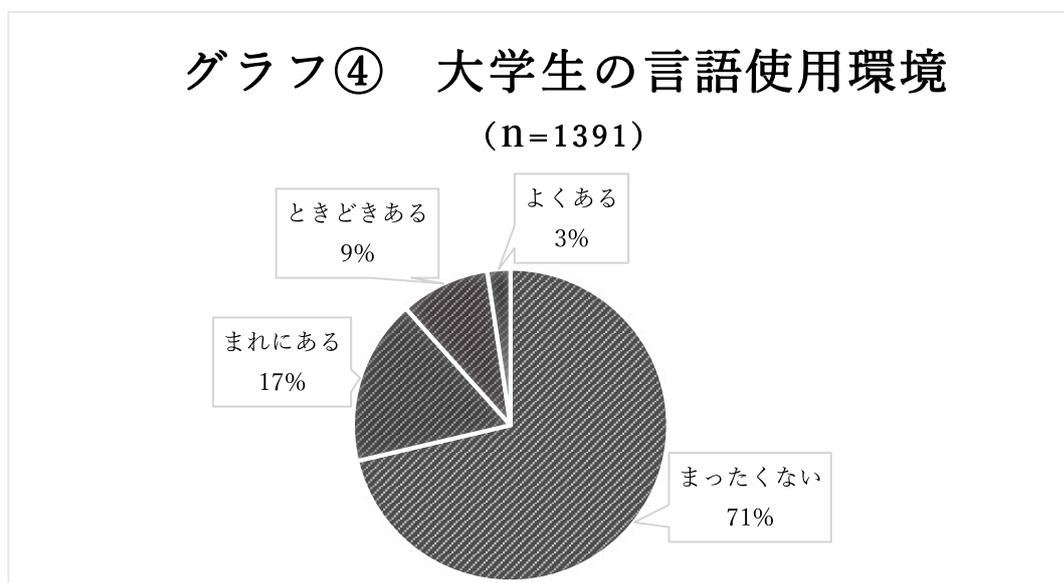
#### 4-2 大学生の言語使用環境

言語使用環境に関する質問は「大学の授業を除いて、英語を使う場面がどのくらいあり

ますか。(1つ選んでください)」で、選択項目は以下の4つである。

1. よくある
2. ときどきある
3. まれにある
4. まったくない

各選択項目の結果は、「まったくない」992名(71%)、「まれにある」238名(17%)、「ときどきある」128名(9%)、「よくある」33名(3%)であった。(グラフ④参照。)



約7割の大学1年生は、日常的に英語を使う機会が「まったくない」と認識している。「まったくない」に「まれにある」をあわせると、約9割の大学1年生は大学の授業を除いて日常生活の中で英語を使う機会はほとんどないと言える。

次に、「まれにある」「ときどきある」「よくある」と答えた人に対して、「どのような場面で英語を使いますか。(複数チェック可)」との質問に対しては、1391名のうち395名が回答した。準備した4つの選択項目では、「友人と英語でコミュニケーションする(157名)」が最も多く、学内の留学生と交流する1年生の様子がうかがわれた。この157名は全回答者1391名の11%であり、友人と英語でコミュニケーションをとっている学生は全体の約1割程度であると予想できる。続いて、「英語カフェ(授業以外の英語レッスン等)に参加する(90名)」、「家族と英語でコミュニケーションする(35名)」となっている。

「その他」を選んだ156名からの自由記述の内容を見ると、大学生が英語を使う場面は

多様化していることがわかる。「その他」の記載を整理すると、「塾講師のバイトで（32名）」が最も多い。次に、バイト先を含めて店や駅などで外出中に「外国人に話しかけられたり、外国人を助けたりする時（19名）」は、地方都市においても外国人観光客が増加していることを反映しているようである。続いて「ニュースや記事を読むとき（10名）」「英語のゲームをするとき（9名）」「YouTube等の動画（8名）」「Webサイトを見る（7名）」「SNSでのやりとり（4名）」などがあり、ネット環境を利用した様々な英語使用の場面を挙げている学生が多かった。

日本では、母語である日本語によってほぼすべてのコミュニケーションが成り立つ環境である。そして日本の地方大学においては、海外からの留学生が同じキャンパスに学ぶ環境であっても、学内で授業以外に英語を使用する機会を享受している学生はまだ多くないのが現状である。繰り返しとなるが、4-1 学習動機で示された高い「コミュニケーション志向」を活かすことができる教育環境の創出を検討することが重要であると考えられる。

次に、＜アンケート調査2＞で実施した質問項目のうち、4-3「目標とする英語コミュニケーション能力」、4-4「学びたい授業内容」、4-5「海外体験の期間」、4-6「海外プログラムの内容」について報告する。

#### 4-3 目標とする英語コミュニケーション能力

目標とする英語コミュニケーション能力に関する質問は「あなたが目標とする英語コミュニケーション能力を一つ選んでください」で、選択項目は以下の5つである。

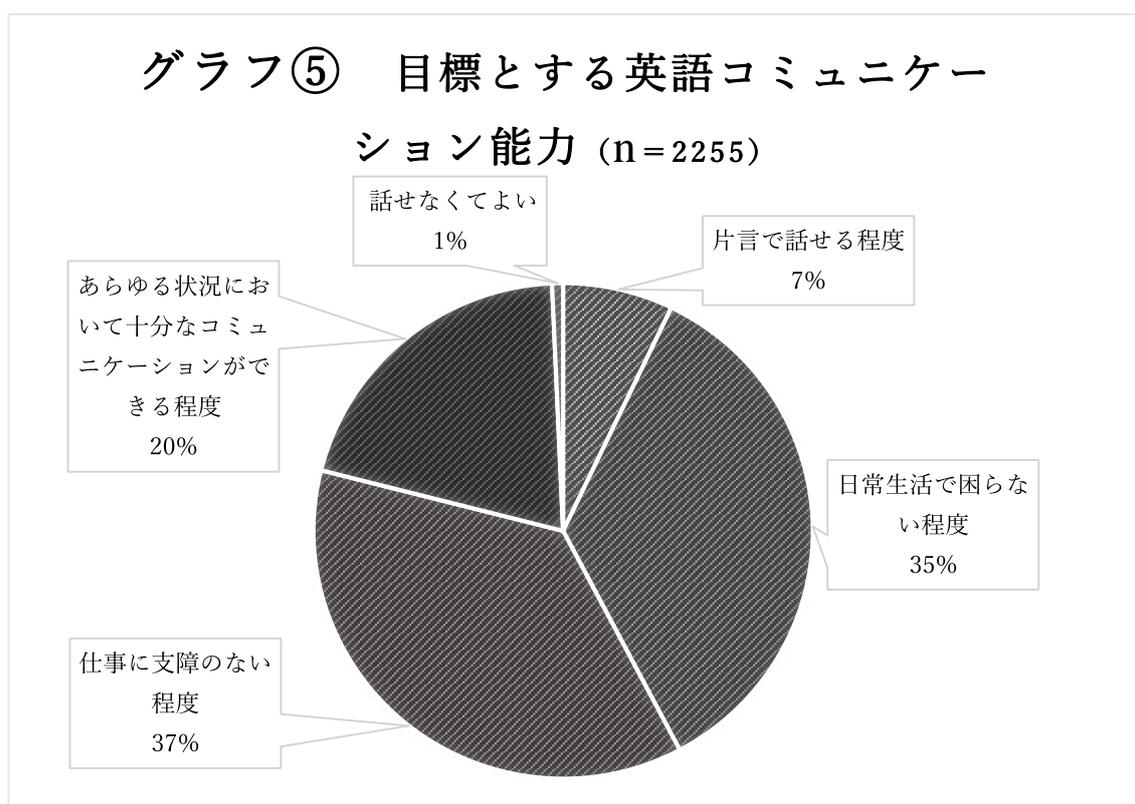
1. 片言で話せる程度
2. 日常生活で困らない程度
3. 仕事に支障のない程度
4. あらゆる状況において十分なコミュニケーションができる程度
5. 話せなくてよい

各項目の結果は、「片言で話せる程度」161名（7%）、「日常生活で困らない程度」792名（35%）、「仕事に支障のない程度」827名（37%）、「あらゆる状況において十分なコミュニケーションができる程度」459名（20%）「話せなくてよい」16名（1%）であった。

（グラフ⑤参照。）

日本人大学生にとって「片言で話せる程度」「話せなくてよい」という目標は低すぎることは言うまでもないが、海外における研究活動やビジネスを行う場合には「日常生活で困らない程度」という目標では十分とは言えないと考えるべきかもしれない。そうすると4割強の学生は、目標とする英語コミュニケーション能力に対する意識付けに課題があると言える。自律学習の出発点は目標設定だと考えられているが、多くの日本人大学生

の場合、入学と同時に「受験」という大きな目標を失い、明確な外発的動機付けがなく英語学習から遠ざかってしまい受験期までに上昇した英語力が、大学1、2年生をピークにして徐々に下降する現象が見られる。(寺西他: 2023) そしてこのような現象の見られる学生に対しては、意識改革が必要であると考えられる。専門分野による違いや進路による温度差などについてよりきめ細やかな実態把握を行い、英語力向上の重要性を大学側が根気強く学生に伝えていく必要があるだろう。



一方、高い英語コミュニケーション能力を目標としている学生（「仕事に支障のない程度」および「あらゆる状況において十分なコミュニケーションができる程度」）の割合は合わせて57%である。高い目標をもつ学生の英語力を向上させるためには、授業以外における自主学習を習慣づけることが大切である。入学時に高い目標をもつ学生であっても、学年が進むにつれて徐々にその意識が薄れることは起きやすい。現在、卒業要件や進級要件に外部試験のスコアを設定したり、取得単位数を増やすなどの検討が行われている。それらの外的動機付けと合わせて、より内的な自己決定による自律学習を促進できる対策や環境創出の検討も重要になってくるだろう<sup>(6)</sup>。

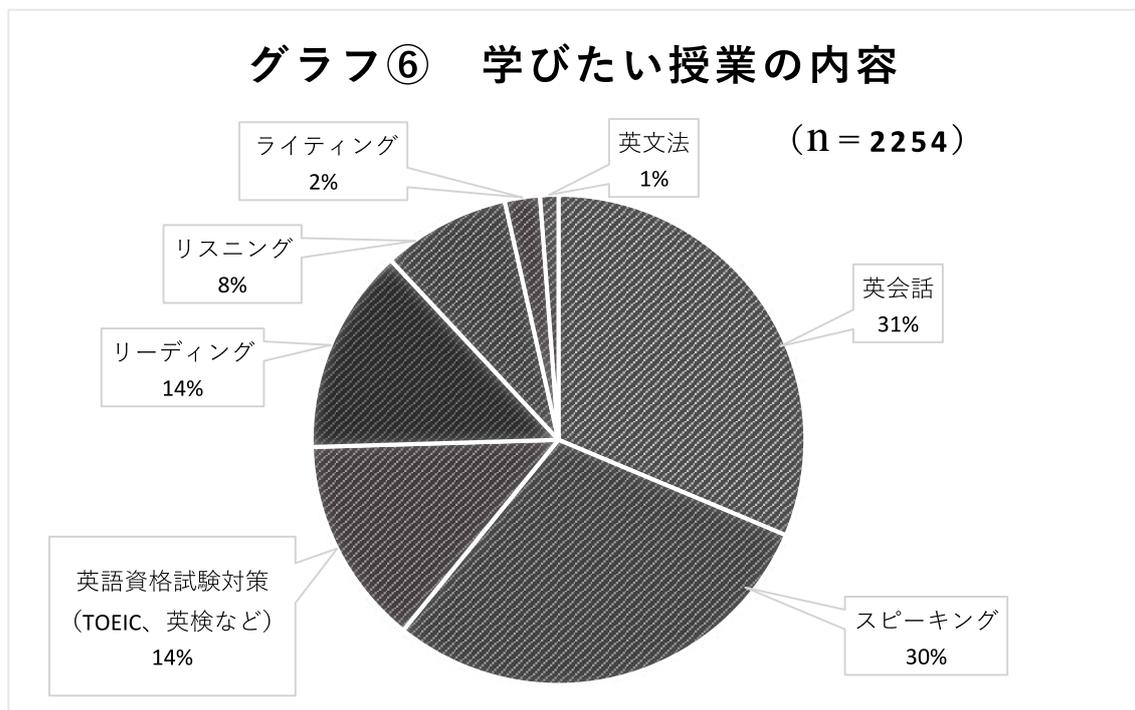
#### 4-4 学びたい授業内容

学びたい授業内容に関する質問は「大学の英語の授業で最も学びたい内容を一つ選んでください」で、選択肢は以下の7つである。

1. リスニング
2. リーディング
3. スピーキング
4. ライティング
5. 英会話
6. 英文法
7. 英語資格試験対策（TOEIC、英検など）

各項目の結果は、「英会話」707名（31%）、「スピーキング」664名（30%）、「英語資格試験対策」309名（14%）、「リーディング」306名（14%）、「リスニング」189名（8%）、「ライティング」52名（2%）、「英文法」27名（1%）となった。（グラフ⑥参照。）

結果として、約6割の学生が授業で「英会話」または「スピーキング」を学びたいと回答した<sup>(7)</sup>。英会話は実際の対話を通じたやりとりであり、「話す」「聴く」に加えて異文化間の対人関係を構築するスキルなども必要とされる。スピーキングはプレゼンテーションやスピーチなどの文脈で用いる話すスキルである。回答者は明確な区別をしないで選択している可能性もあるが、「話す」力を学びたいと多くの1年生が考えていることがわかる。これは、4-1で示した「コミュニケーション志向」の高さを反映する結果とも言える。



この質問ではアンケート形式の都合上、単一選択であったので、もし複数選択可であれば、それぞれの割合は増加していただろう。しかし、4-1の学習動機の調査では8割以上が「スコア取得志向」を持っているにもかかわらず、ここで資格試験対策を回答に選んだ学生は14%と激減しており、英語授業を1つだけ履修する場合は試験対策よりも英会話およびスピーキングを学びたいというニーズのほうが優先されていると言える。

4-1において「コミュニケーション志向」の割合は64%と非常に高かったが、この「学びたい授業の内容」の調査結果でも6割の学生が「英会話」や「スピーキング」といった「話す」スキルに重点を置いた授業を優先的に受けたいと考えていることが示された。しかし、実際の大学英語カリキュラムの中では、話す機会を十分に提供できているかと言えば決してそうではない。現行の英語カリキュラムでは、1年生の必修科目において4スキルをバランスよく向上させることを意図して設計されている。「英語（スピーキング）」「英語（リーディング）」「英語（ライティング）」「英語（リスニング）」の4科目が必修となっており、1年生の1・2学期または3・4学期にそれぞれ2科目ずつ履修を行う。各科目は1学期に1回50分の授業を7回実施のあと1回試験を行い、それを2学期続ける。したがって、「英語（スピーキング）」の授業時間は、合計すると50分授業が14回で700分程度となる。学生の学びに対するニーズに応えるためには、「話す」スキルを学ぶ機会をもっと提供できるような検討が必要であると言えるかもしれない。例えば、スピーキング重視の選択科目の配置を増やすことや、正課外でも語学カフェの有効利用など「話す」スキルを実践的に活用できる環境整備をするなど<sup>(8)</sup>、柔軟で多様な言語学習機会

の提供についての施策を継続して模索するべきであろう。

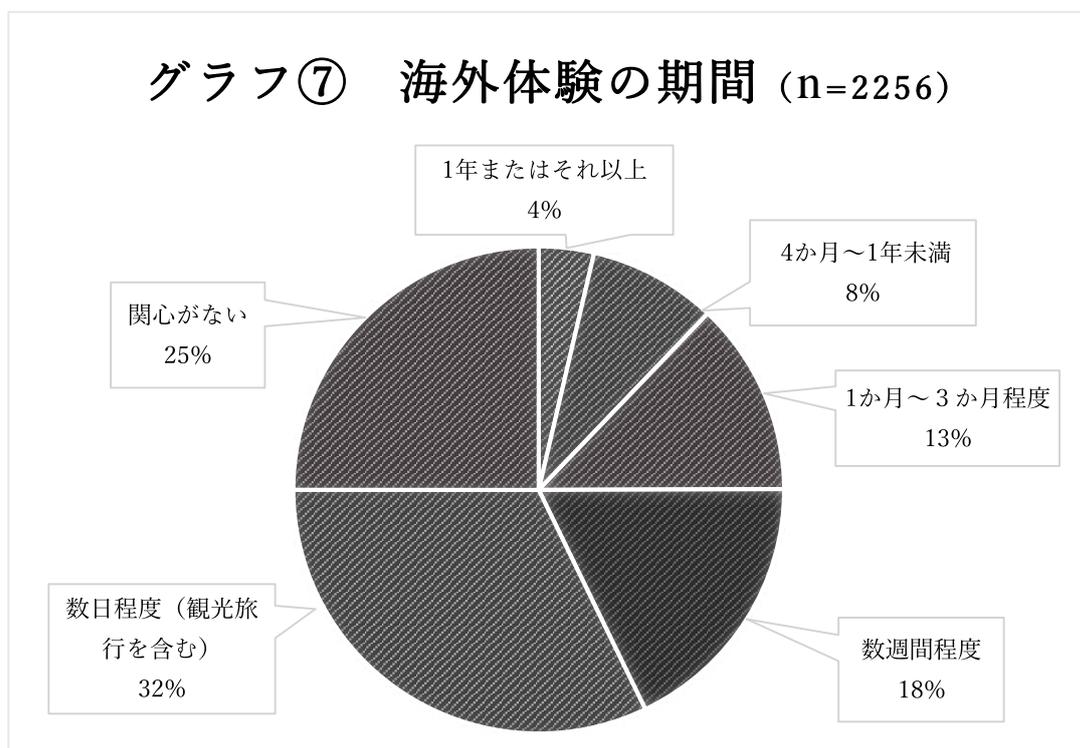
また「英会話」の授業については、大学は英会話学校ではないという批判的な意見も少なくない。特に、扱うトピックが稚拙な内容に終始している場合にはこのような批判に繋がりがやすい。実際、リーディング授業などに比べると、会話では複雑で抽象的な内容を扱うことが困難であるため、大学生の知的レベルに合わせるコンテンツを導入するには工夫が必要となる。実際の英語運用能力を考慮しながら、大学生にふさわしい豊かなトピックを提供し学生の興味関心をそらさない授業実践の試行も実施していかなければならない<sup>(9)</sup>。

#### 4-5 海外体験の期間

海外体験に関する質問は「在学中に行う留学やボランティア活動などの海外体験について一つ選んでください」で、選択肢は以下の6つである。

1. 1年またはそれ以上の海外体験をしたい
2. 4か月～1年未満の海外体験をしたい
3. 1か月～3か月程度の海外体験をしたい
4. 数週間程度の海外体験をしたい
5. 数日程度の海外体験をしたい（観光旅行を含む）
6. 今のところ、海外体験に関心がない

各項目の結果は、1. 「1年またはそれ以上」81名（4%）、2. 「4か月～1年未満」191名（8%）、3. 「1か月～3か月程度」290名（13%）4. 「数週間程度」404名（18%）、5. 「数日程度（観光旅行を含む）」726名（32%）、6. 「関心がない」564名（25%）であった。（グラフ⑦参照。）



まず、全体の約4分の1の学生が海外体験に関心がないことに注目したい。大学がグローバル人材育成を主要目標として掲げている現状において、海外体験への関心が低い学生の比率は問題とみなされるべきかもしれない。大学が国際的な多様性を重視する観点からも、英語教育への影響のみならず、異なる文化や背景に触れる機会を逃がすことに繋がり、多様性の促進に対する課題ともなり得る。個々の学生には異なる背景や考え方があるため、海外体験に関心がない理由については追跡調査が必要であろう。経済面での課題が障壁となっているかもしれないし、コロナ禍の影響や円安、不安定な世界事情などが大学生の内面に影響して海外への志向性が弱まっているといった社会的な影響があるのかもしれない。

また、学生の約3割が観光旅行を含めた短期間の海外体験に興味を示していることは、大学のグローバル人材育成においても重要な示唆を提供している。1週間以下の短期間の海外体験では実質的に英語スキルを向上させるには短く、限られた効果しか期待できないかもしれない。しかしそれは異なる文化や環境に触れる機会となり、学生の異文化理解を促進し、国際的視野を広げるきっかけとなり得るだろう。実習が多い学部学科など長期間の留学が困難であるケースもあり、短期間の海外体験は実現可能な選択肢として位置付けることができるだろう。

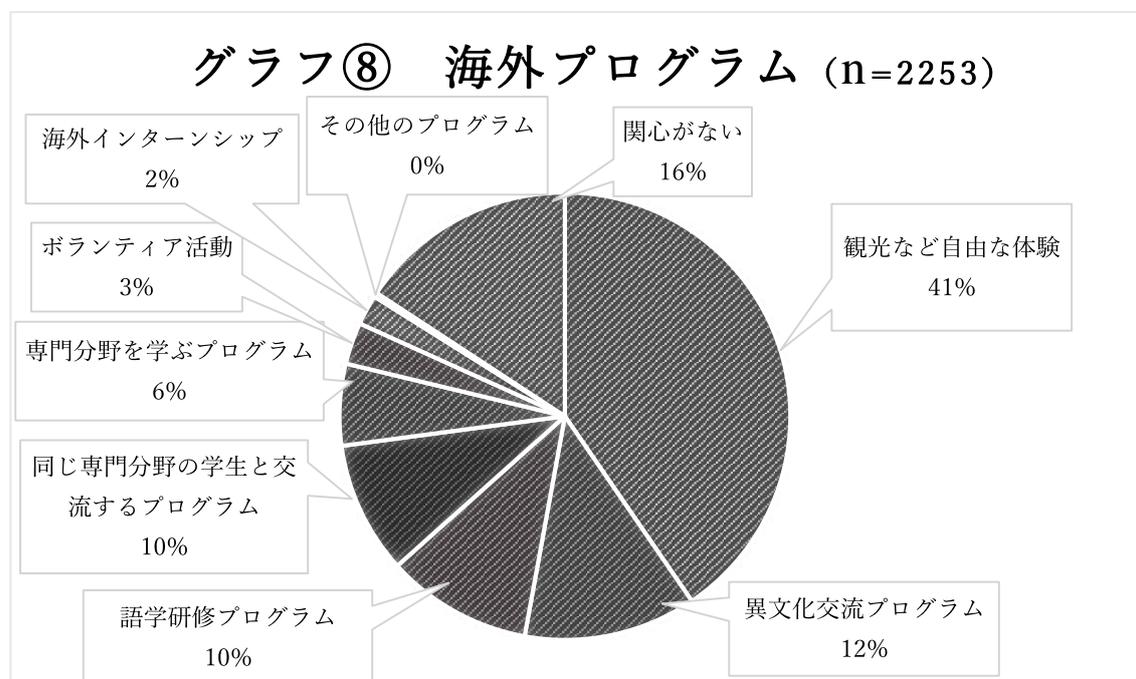
#### 4-6 海外プログラムの内容

海外プログラムに関する質問は「関心のある海外プログラムの内容について一つ選んで

ください。」で、選択肢は以下の9つである。

1. 海外の語学研修プログラムに参加したい
2. 海外の異文化交流プログラムに参加したい
3. 専門分野を学ぶ海外プログラムに参加したい
4. 自分と同じ専門分野の学生と交流する海外プログラムに参加したい
5. 海外のボランティア活動に参加したい
6. 海外のインターンシップに参加したい
7. 観光など自由に海外体験をしたい
8. その他のプログラム
9. 関心がない

各項目の結果は、「観光など自由な体験」912名(41%)、「異文化交流プログラム」279名(12%)、「語学研修プログラム」236名(10%)、「同じ専門分野の学生と交流するプログラム」215名(10%)、「専門分野を学ぶプログラム」133名(6%)、「海外ボランティア活動」68名(3%)、「海外インターンシップ」49名(2%)、「その他のプログラム」7名(0%)、「関心がない」354名(16%)であった。(グラフ⑧参照。)



まず、約4割の学生が観光など自由な海外体験を希望している。4-5で海外体験に「関心がない」と回答した学生のうち、一定数がこの選択肢を選んだと考えられる。前述

したように、短期間の海外旅行は学びの機会として位置付けることもできるが、学生の自由なプランによる海外活動は自己発見の機会となるなどの価値がある。より自由な学生の体験を大学が推奨するという考え方も恩恵をもたらす可能性がある。

なお「観光など自由な体験」「関心がない」を除いて、約4割の学生が海外プログラムに関心を示した。大学が提供する海外プログラムはその内容に応じて大きく3つに分類できる。

- 【1】 言語学習に焦点を当てたプログラム
- 【2】 異文化交流を促進するプログラム
- 【3】 専門分野の知識や経験を深化させるプログラム

【1】と【2】、あるいはその2つを融合させたものは、全学の学生を対象に様々なプログラムが実施されている。【3】に関しては学部学科の特性によって学生の興味関心に違いが生じるため、学部学科やゼミ単位でのプログラム構築がより高い成果を期待できるだろう。また「ボランティア活動」(2%)、「海外インターンシップ」(3%)に関心を示している学生もいる。英語教育担当の部署と関係部署とが連携をとり、学生のニーズに合った有益なプログラムの提供を充実させていくことが英語力向上にも繋がると考える。

## 8. おわりに

本稿では、2023年度入学生を対象に実施した2つのアンケート調査の報告と考察を行った。調査結果によって示された学生の実態を正しく理解することによって、科目内容をプランし、カリキュラムに柔軟性をもたせ、学生の多様性に対応できるような学内の学習環境を整備するなど、引き続き活発な取り組みが求められる。また、今回は扱うことができなかった入学選抜方式の違いにも着目して、学生の英語学習に関する実態を継続して調査していきたいと考える。

## 注

- (1) Barr & Tagg (1995)を参照。
- (2) 選択項目は、2021年度に実施した調査と同じものを使用した。項目は、Google フォームを用いてパイロット調査を実施し、英語学習の動機についての自由記述を整理し作成した。回答は、150名から得られた。詳細は、寺西他(2023)を参照。
- (3) 第二言語習得の動機付け(motivation)には、「道具的動機付け」と「統合的動機付け」の分類(Gardner:1985)があり、選択項目1, 2, 3は「道具的動機付け」、選択項目6は「統合的動機付け」にあたる。しかしこの既存の理論的枠組みを、英語圏文化や言語に触れる機会が少ない日本の言語使用環境にあてはめることに限界があるとの指摘は

- 多く、また言語バイタリティーの強い英語を学習する場合、枠組みの区別が薄れる可能性も指摘されている（八島：2004）。またその後、Dörnyei (2005, 2009) が提唱した「理想第二言語自己」の分類が大きな影響力を持ち、動機付けの研究成果が蓄積されている。
- (4) 2023年度調査は1年生全学生を対象にしているのに対し、2021年度調査は選択英語科目の履修学生を対象にしていることから、英語学習への動機付けが比較的高い学生が選択科目を履修するという前提で考えれば、2年生以上の全学生にアンケート実施をした場合にはこれらの数値はさらに低くなると考えられる。
  - (5) 日本人大学生の（正課内・正課外を含めた）包括的な英語学習に対する動機付けの変容に関する調査はまだ少ない。第二言語習得の動機付けに関わる研究では、個々の授業や特定の活動に対する「やる気」や「意欲」を扱うなど（福田：2020）、教室内（正課内）の学習に関する動機付け研究が多い。大学生を対象にしたものでは、動機付けと英語習熟度の関連性を調査した伊藤・森泉（2020）などが示されているが、中学・高校生対象の動機付け研究に比べて日本人大学生を対象とした研究は少ない現状である。
  - (6) 自己決定理論に関しては、Noels et al. (2000)を参照。
  - (7) 学部学科ごとに、注目すべき特徴がいくつか見られた。例えば、Global Discovery Programでは、ライティングを選択した学生の割合が高い（23%）。学部学科ごとのデータ集計は、教育推進機構が発行している『活動報告』に掲載予定である。
  - (8) 岡山大学には、L-café が設置されている。
  - (9) 岡山大学の選択科目では、主に3・4年生を対象に『上級英語（Bridge-Business）』『プレ上級英語（Bridge-Academic）』を開講し、大学生の知的レベルを考慮したコンテンツを用いてコミュニケーションを上達させるクラスを試行している。

## 引用文献

- Barr, R. B., & Tagg, J. (1995). From teaching to learning —a new paradigm for undergraduate education. *Change: The Magazine of Higher Learning*, 27(6), 12–26.  
<https://doi.org/10.1080/00091383.1995.10544672>
- Dörnyei, Z. (2005). *The Psychology of the Language Learner: Individual Differences in Second Language Acquisition*. Routledge.
- Dörnyei, Z., & Ryan, S. (2015). *The Psychology of the Language Learner Revisited*. Routledge.
- Dörnyei, Z., & Ushioda, E. (2009). *Motivation, Language Identity and the L2 Self*. Multilingual Matters.
- Gardner, R. C. (1985). *Social Psychology and Second Language Learning: The Role of Attitudes and Motivation*. Hodder Arnold.
- Noels, K. A., Pelletier, L. G., Clement, R. W., & Vallerand, R. J. (2000). Why are you learning a

second language? Motivational orientations and self-determination theory. *Language*

*Learning*, 50(1), 57–85. <https://doi.org/10.1111/0023-8333.00111>

伊藤聡子・森泉哲(2015). 「学習者の動機づけと英語習熟度—L2 動機づけ自己システム理論からの検討—」『アカデミア. 文学・語学篇』98号, 89–112.

寺西雅子・劔持淑・荻野勝・大年順子・伊野英男(2023). 「大学における英語科目設計の改善に向けて— 学習動機に関するアンケート調査の報告」『岡山大学全学教育・学生支援機構教育研究紀要』7号, 67–86. <http://doi.org/10.18926/64998> (閲覧日: 2023年9月25日)

福田晶子(2021). 「日本人大学生の英語学習における自己調整学習能力尺度の開発: 英語資格試験に向けた自主学習に焦点を当てて」 *Eiken Bulletin*, 32, 218–234.

文部科学省. 「学習指導要領「生きる力」」 [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/) (閲覧日: 2023年9月25日)

文部科学省. 「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン(答申)」(中教審第211号) [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1411360.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1411360.htm) (閲覧日: 2023年9月25日)

八島智子(2004). 『外国語コミュニケーションの情意と動機—研究と教育の視点—』関西大学出版部.

八島智子(2019). 『外国語学習とコミュニケーションの心理』関西大学出版部.